

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

—カメルーン・ヤウンデ第 1 大学、フルベ語、(H20. 12. 4 - H21. 3. 23) —

平成 20 年度入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 2 回生
早坂 麗子

自身の研究テーマについて

フルベは、西アフリカ・セネガルに起源を持つ民族である。現在のフルベの居住地域は 13 世紀ごろに開始された東方移動を経て、西アフリカからスーダンに至るまでの広い範囲に及んでいる。フルベのもともとの生業である牧畜を今なお生活の中心とする一派はボロロと呼ばれている。本研究が対象とするのはこの人びとである。本研究では特にボロロの乳製品販売に焦点をあてる。

乳製品販売は彼らの現金収入源の一つである。ボロロは伝統的に、牛から得られる乳を自家消費すると同時に、ヨーグルトあるいはバターといった乳製品を作り市場で販売してきた。本研究はボロロの伝統的な乳製品加工形態とその販売、流通体系を明らかにし、それを通して彼らの社会の特質を描くことを目的とする。

また、カメルーンの酪農事情は、乳牛の在来種と輸入種との交配プログラムの導入や海外 NGO が関わるミルク加工場が開始されるなど、ここ数十年で大きく変化している。そうした変化は、牧畜を生業とするボロロの生活に大きな影響を与えている。本研究では、そういった、彼らを取り巻く状況も同時に概観しながら、現代を生きる牧畜民社会の姿を描きたいと考えている。



<図 1：販売用のバターと搾乳>



<図 2：牛乳を攪拌し、得られた油の固まり>

研修言語の概要

フルベ語（英語ではFula）は、西アフリカのセネガルからスーダンに広く分散して暮らすフルベの母語であり、ニジェール・コンゴ語群に属する。どの地域の言葉が標準的とはいえないが、ニジェール川を境にして大きく西の方言と東の方言に分かれる。（江口、1993）*。カメルーン北部においては、地域共通語として非フルベ系民族の間でも使用されている。

語学研修の内容について

授業はヤウンデ第 I 大学にて行われた。今回カメルーンには私と、同級生の山口良太君が派遣されたが、この授業は我々のために特別に行われたもので、他に生徒はいなかった。

授業ではアフリカ言語の分類を概観した後、特にバンツー諸語について音韻論、形態論、構文論の観点から分析が行われた。授業は英語で行われ、1 回の授業で 1 時間半～2 時間、平日はほぼ毎日行われた。

また、その講義に加え、フルベ語を用いた会話能力の向上を目的とした授業も特別に行ってもらった。これは、受け入れ先の先生にヤウンデ第 1 大学の院生を紹介してもらった後、彼に直接依頼し、実現したものである。

フルベ語は初学の私に対し、授業は数の教え方から始まった。その後基本的な文法を教わり、1 対 1 での対話演習を行った。読み書きよりも会話中心の授業で、与えられた単語を使って文章を作る、あるいは英語をフルベ語に直して話す、といったエクササイズも何度か行った。この授業も英語で行われ、1 回の授業時間も先の授業と同様で 1 時間半～2 時間行われた。



<図 3：ヤウンデ第 I 大学の教室>



<図 4：ヤウンデ大学の学生と>

*フルベは自身の言語を、Pulaar（セネガル）、Pular（ギニア）、Fulfulde（マリ、その他東方）と呼ぶ（Arnott、1970）。

江口（1993）は「フルフルデ語」との表記をしたが、ここでは全てを包括する「Fula」の訳語として「フルベ語」との表記を用いたい。

研修期間中に印象に残った体験や経験

研修中の一時期、フルベの家族の家にホームステイしていたのだが、その家のお父さんは、あれは何だ、これは知っているかと私のフルベ語を試すことがしばしばあった。

例えばこういった具合である。彼は「kodo (外人、よそ者／客) とは何だ」、と問う。すると私が「bana miin (私のような (人))」と答える。すると彼はにっこり笑って「その通り！」と言う。

二人の間の共通語はフルベ語である。したがってこうしたチェックが入ったとき、フルベ語を他の言葉で置き換えて覚えていても無意味で、フルベ語の単語をフルベ語で説明しなくてはならない。

こうした問答は、最初のうちこそ辛かったが、それを繰り返す中で言葉が自分の中に根付いていくのを感じた。それは、言葉その言葉を使っている人の概念で理解する作業であり、生きた言葉に触れる、貴重な経験であった。現地だからこそできたハードな、しかし実践的な学習であった。

目標の達成度や反省点について

今回目標としていた、実践的な会話能力の習得はある程度達成することができた。研修を通じて聞く能力、話す能力は格段に進歩し、最低限の会話能力が得られた。また、研修の後半では、会話能力を活かし自身の研究テーマに関する聞き取りも若干行い、次回の調査の素地を作ることが出来た。また、受容れ大学において他の研究者との交流もあり、次回の調査に活かせる人脈も築けたことも大きな収穫である。

総じて、今回の研修は次回の調査に繋がる、実りのあるものだった。しかし、現段階では文法を押さえきれておらず、また、文章の読解能力については不安が残る。その点については、今後自己学習を続ける上での課題とし、次回調査までには克服したいと考えている。

参考文献

江口一久、1993、「フルフルデ語」、柴田武編、『世界のことば小事典』、大修館書店

D. W. Arnott, 1970, *The nominal and verbal systems of fula*, Oxford at the clarendon press